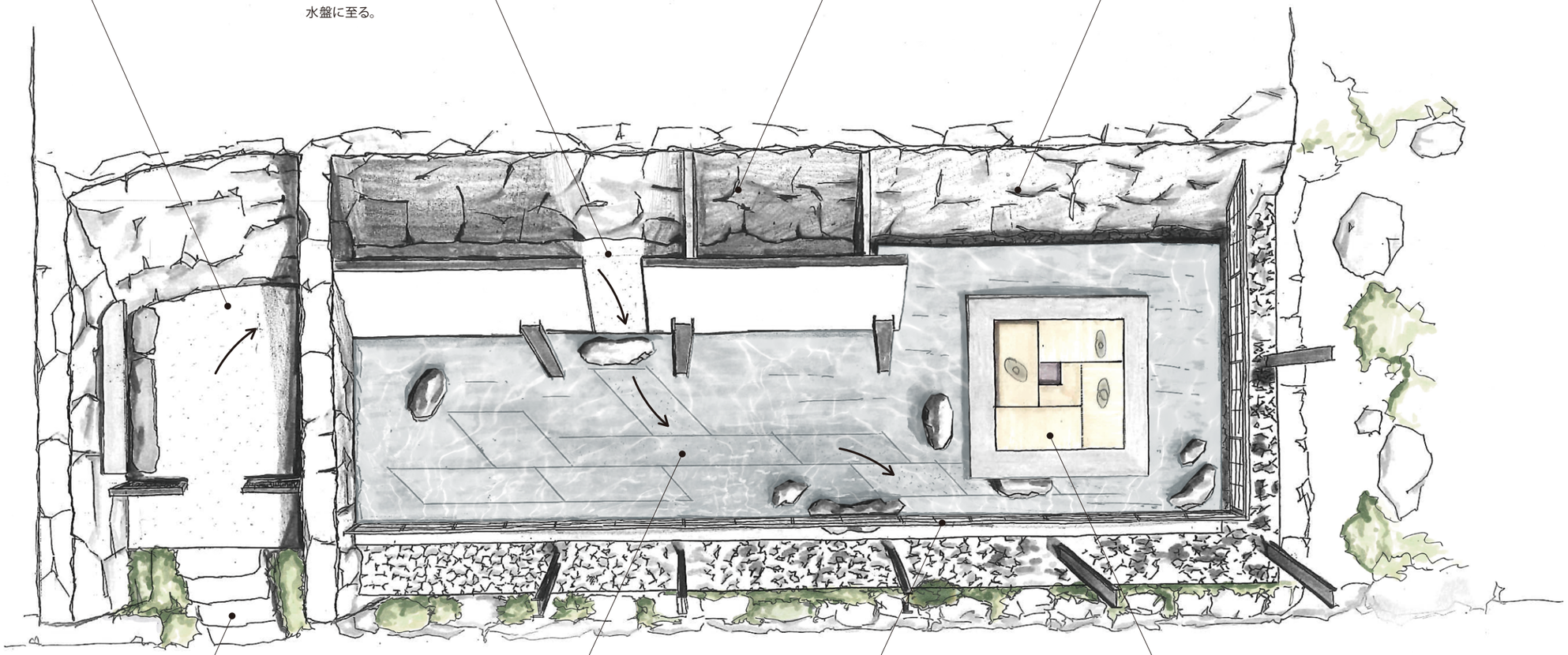

CONCEPT

名建築には驚きや感動がなければならない。茶室における感動は沈黙に集約する。そこでは、客と亭主が世俗を離れて自然と一体となり、もてなしの心を愛でながら、時の移ろいに心を置く。そこはかとない色気と高貴さが漂い、空間に凛とした間を纏わせるのだ。この茶席は露地組した石に、極浅く水を張り巡らされた水鏡の上に浮かんでいる。水を通して石の一部が見え、一部は景石や洲浜として姿を現す。水鏡でかき消された水底は、石の広がる予感を残して人の動きと共に変化し、常に全容を隠し続ける。

客人は背後に陰りを秘めた水の上を歩いているような錯覚を憶えながら席入りするのだ。待合から細長く薄暗い通路を進んだ奥に開口が穿たれ、暗がりは水鏡に切り替わる。正面には宙に浮いた紙障子が水平に連続する。低く切り取られた景色と紙障子は程よい間合いを生み、水鏡の陰影と共に空間に静けさを与える。茶室に沈黙を内包させることで、訪れた客人は風や水、光の移ろいや音に沈潜し、安らぎの時を過ごす事ができるのだ。